

## 都市郊外高齢者の食生活別にみた3年後の生存との関連

○藤井暢弥、星 且二（首都大学東京大学院都市環境科学研究科都市システム科学域）

**【背景】**1979年に米国のヘルシーピープル・レポートで生活様式が死亡に与える影響が極めて大きいことが示された。今日、生活様式は死亡や疾病の主な決定要因として認知されている（Berkman & Breslow 1983）。DollとPeto（1981）は、ガン死亡の発生要因の生活様式の中でも食餌（日常の食事）の割合が最も高いと推計した。McKeown（1979）は、はしか、猩紅熱の感染死亡率低下には栄養の改善、下水道などの環境設備が不可欠であることを示した。星ら（2010）は低いBMI値、低身長の人において生存日数は有意に短いことを示した。

これらの報告書や先行研究から食生活が死亡や疾病に大きく寄与していることが推定される。

**【目的】**都市郊外高齢者の食生活別にみた3年後の生存との関連を性別、前期・後期高齢者群別、性別ごとの前期・後期高齢者群別に明確にする。

**【方法】**データ：2004年9月に関東地域の都市郊外であるA市に居住する65歳以上の全ての在宅高齢者20,938名を調査対象者にして、郵送配布回収方式による自記式質問紙調査を行い、13,460人（回収率64.3%）の回答を得た。2004年9月1日から2007年8月1日までの三年間で、転居者501人、ID不明者126人、85歳以上の者856人を除いた65-84歳の男女11,977人を分析対象者とした。3年間の死亡者は、男性362人、女性187人である。調査項目：食生活頻度（食習慣）に関する14の質問項目、3年間の生存状況。

統計学的検定法：有意水準1%でピアソンのカイ二乗検定およびソーマンの残差分析を用いた。

**【結果】**性別の食生活別にみた3年後の生存との関連をみると、男女ともに統計学的にみて有意に高い死亡群の食生活別の選択肢項目は、大豆食品「食べない」、野菜料理「週3~4日」「食べない」、塩蔵物「食べない」であった。男性のみ有意な高死亡群項目は、1日の食事「4回以上」

「1回」、1日のひとり食「3回以上」であった。女性のみ有意な高死亡群項目は、肉料理「食べない」、背の青い魚「食べない」、乳製品「食べない」、果物「食べない」、油を使う料理「食べない」であった。

男女ともに有意な低死亡群項目は、野菜料理「毎日食べる」であった。男性のみ有意な低死亡群項目は、1日のひとり食「1回」であった。女性のみ有意な低死亡群項目は、肉料理「週3~4日」、果物「毎日食べる」、塩蔵物「週5~6日」であった。

前期・後期高齢者群別の食生活別にみた3年後の生存との関連をみると、前期・後期高齢者群ともに統計学的にみて有意に高い死亡群の食生活別の選択肢項目は、油を使う料理「食べない」、1日の食事「4回以上」であった。前期高齢者群のみ有意な高死亡群項目は、大豆食品「週3~4回」「食べない」、背の青い魚「食べない」、野菜料理「週3~4回」「食べない」であった。後期高齢者群のみ有意な高死亡群項目は、野菜料理「週1~2日」、塩蔵物「食べない」であった。

前期・後期高齢者群ともに有意な低死亡群項目は、野菜料理「毎日食べる」であった。前期高齢者群のみ有意な低死亡群項目は、大豆食品「毎日食べる」、乳製品「毎日食べる」、果物「毎日食べる」、塩蔵物「週5~6回」であった。後期高齢者群のみ有意な低死亡群項目は、1日の食事「3回」であった。

以上から、性別、前期・後期高齢者群別によって、肉料理、大豆食品、背の青い魚、乳製品、果物、野菜料理、塩蔵物、油を使う料理の摂取および1日の食事、1日のひとり食の頻度は3年後の生存と関連していた。

性別ごとの前期・後期高齢者群別の分析結果は当日に発表する。

E-mail ; fujii-nobuya@tmu.ac.jp